[COMMUNION]
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678 Diocese Office

コミュニオン
東京教区時報［大斎節号］

第８号（通巻１２４３号）
2013年２月10日
編集：広報委員会　委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園３－６－１８

《巻頭メッセージ》

イマジン

司祭 ヨナタン　長谷川　正昭

１９６３年、アメリカの公民権運動の指導者マルチン・ルーサー・キング牧師は、ワシントン大行進の集会において説教し、「私には夢がある」という言葉を何回も語り、この運動にかける自らのヴィジョンを集まった大群衆に植えつけました。

「私には夢があります。それはいつの日か、この国は立ちあがって、その信条の意義を生き抜く国になるだろうという夢です。私には夢があります。それはいつの日か、ジョージアの赤土の上で昔の奴隷の子孫と昔の奴隷主の子孫とが兄弟愛のテーブルに一緒に座ることができるようになるだろうという夢です。・・・・これが我々の希望です。これが私が南部に持ち帰って行く信仰です。この信仰をもってすれば、我々は絶望の山から希望の石を切り出すことができるでしょう。」

このキング牧師の夢は、約半世紀後、オバマ大統領の選出と再選によって実現したということが出来ると思います。夢というのは決して非現実的なものではなく、その実現のために時間がかかるとしても、必ず実を結ぶものであることがわかります。夢というのは想像力の所産です。かくあれかしという希望をイメージ豊かにふくらませる構想力が、偉大なヴィジョンを形成し、やがてそれが現実を動かしていくのです。

小職の学生時代、スチューデントパワーが世界的な拡がりで吹き荒れたことがありましたが、或る大学の壁の落書きに「想像力が権力を奪う」という美しい語句が刻まれており、話題になったことがありました。キング牧師と同じように、アメリカで凶弾に倒れたジョン・レノンの想像力について歌った「イマジン」という有名な曲があります。

♪想像してみて、天国はないって　やれば簡単だよ、足元には地獄はなく、頭上には空だけ／想像してみて、みんなが今日のために生きているって／想像してみて、国は存在しないって　難しくないよ、そのために殺したり死ぬことないよ、宗教もない／想像してみて、平和な人生を／想像してみて、財産はないって、出来るかな、欲張りや飢えは必要ない、人はみな兄弟／想像してみて、みんなが世界を共有しているって／ぼくが夢を見てるって思うかな、でもぼく一人だけじゃない／いつか君たちも一緒になって、世界が一つになってほしい♪

夢・幻の類という言い方があります。非現実的なものの代名詞です。しかし「幻なき民は滅ぶ」という旧約箴言の言葉もあります。夢を抱くこと、幻を見ること、そして、それを多くの人々と分かち合うこと、そのことによって夢は単なる夢に終わらず、現実化するのです。そのためには私たちがもっともっと想像力を羽ばたかせて、イメージ豊かに未来を夢見、構想力をもってヴィジョンを抱くことが大事だと愚考します。

（真光教会牧師）

東京教区時報アーカイブ（1）　主教 テモテ 蒔田 誠

今年、東京教区は教区成立90周年を迎える。教区時報は戦後1949年（昭和24年）7月に復刊第1号が出されたが、その時の主教は蒔田誠（まきたまこと）主教であった。今回、アーカイブ・シリーズの第1回として、竹田真主教も一番影響を受けたと言う蒔田主教を取り上げ、戦後の混乱期を支えてくださった主教の思いにふれ、温故知新としたいと思う。

尚、このシリーズは年1回、東京教区の主教、司祭を取り上げていく予定。

（プロフィール：主教在位1947年から59年の12年間、1962年4月26日逝去。趣味将棋）

何が重大か

（1952年9月号掲載）

私には、よくぼんやり考えるくせがある。考えると云っても、だんだん年をとって来たから、たいして欲ばらない。もっぱら自分の務めに関することがらである。

「主教さんは大変ですね」と人がよく同情してくれる。そう云われてみると大変の様な気もするが、他の人に出来なくて、主教だけに出来ることと云えば、信徒按手と聖職按手くらいである。ただ人の頭に手をおくということ、恐ろしく簡単なことである。しかも、それをやっていると人が「主教さんは大変ですね」と云うのである。何が大変か、私はそんなことをぼんやり考えつづけるのである。

信徒按手とは何か。それに関しては随分いろいろなものを読みもし、先輩にも聞いてみた。そんなことは洗礼同様もう分かり切ったことで、誰でもが知っていて分からないのは自分くらいかとも思ってみた。ところが、1948年のランベス会議に行ったとき「英国で今何が神学の重大問題ですか」と質問したら、「洗礼と信徒按手、また第一陪餐のことですよ」と云われて驚いた。聖公会の本家のようなところで今更のように問題にしているというのである。

勿論、信徒按手を疑う者はないし、それによって神様から恩恵を受けることは確実である。しかし、洗礼との関係において、どのようにして、どのような恩恵を受けるかということになると、それを的確に表現することは難しいらしい。世界中の偉い神学者や主教たちに出来ないことを、私のような者に出来る筈はない。しかしとにかく私にとっては自分の本職に関することだから、私は私なりに一生懸命考えているのである。そしてだんだん考えて行くとこれはとんでもなく重大なことであるな、ということがぼんやりながら分かってき来た。

そして、私にとっては信徒按手が何であるかということも重大であるが、それよりも、信徒按手を行っているというその事実が非常に重大なことになって来たのである。つまり何が重大かといえば、行っていることそれ自体に重大性があるというわけである。

英国の有名な神学者エドワード・キングという人はかつてこんなことを云われたようである。

「もし私が1年のうち9ヶ月聖想して、あとの3ヶ月信徒按手をすることが出来たら、按手を受けた者は皆天国へ直通するであろう」と。もちろんサクラメントであるから、人間の精進如何によって、その価値が変わるものではなく、どんな主教が行ったとて、どんな信徒が受けたとて、神様の恩恵は確実に伝えられるに違いない。しかもそのような性質を持つサクラメントに対して、それだけの精進をささげようというところに神様に対する愛があらわれているのであろう。

私は更にぼんやり考えつづける。教会にとっては何が重大かと。考えの筋は同じことである。教会が行っていて、世の中の人に出来ないこと、そこに重大性があるのではないか。洗礼、信徒按手、聖餐等重大なものはそう沢山ではない。聖職、信徒が一体となってそれらを行っているという、その事が重大なのである。

6月の教区協議会の主題は「主日を守ること」であった。この場合も教会が主日を守っているその事に重大性があった。主日の意味とか、どんな方法で守るかというようなことはただ助けをなすものである。

しかしいくら沢山の議論をしてみたところで、守らなければそれまでである。重大性は守ることそのことに他ならない。そして守っていればだんだん主日の有り難さが分かってくるのである。

私はいつもこんなことをぼんやり考えている主教なのである。

愛隣のこと

―なかなか人を助けるどころではないが―

（1952年6月号掲載）

信者がお互いに助け合った話を折にふれて聞きますが、誠に嬉しいことです。「此の世の荒波をこえ」と洗礼式の祈りのうちにある様に、この世は私共にとって文字通り荒波であります。思いがけぬ災難の波にのまれそうになることがしばしばです。

そんな時に、信者が互いに助け合うのは当然とは云いながら、それは神様が特別にもお喜び下さることでありましょうし真の信心生活と云うことが出来ましょう。「父なる神の前に潔くして穢れなき信心は、孤児と寡婦とをその患難の時に見舞い」とある通りです。

エルサレムの使徒団は、聖徒パウロ及び聖徒バルナバに対し、交わりの印として握手するに当たりただ一言つけ加えて「貧しき者を顧みんこと」を望みました。それに対し、聖徒パウロは「我も固より此のことを励みて行へり」と申して居ります。

かように、教会は初代から、かかる愛隣のわざを教会生活中の一重要事として来たのであります。

聖餐式中、信施を励ます聖語中、「なんじ世の富める者に命ぜよ。惜しみなく施して云々」以下六つの聖語は、この趣旨に基づいて選ばれており、英米等の教会では信施金が実際に救助のために用いられている場合が多いのであります。又教会によっては聖堂のうしろに特別の献金箱を備え、「病者又貧困者のため」と記されているのを見かけます。

私共の生活は「なかなか人を助けるどころではない」と云うのが実状でありますが、然も尚皆様はそれぞれ「左の手に知らせない」様にいろいろ良いことをしておられるのです。私はそれを喜ぶと共に、こんな時代にこそ益々この愛隣の精神が、教区内に於いてよく発揮される様に望んでやみません。

尊敬すべき信徒

（1953年10月号掲載）

「教会の主体は信徒に在る」と云うファーザー・ケレーの言葉を若い時に覚えました。そして、やっとこの頃になって、なる程その通りだと思える様になったのです。信徒運動が始まっている折柄、信徒をおだてるためにこんなことを云い出したわけではありません。本当にそう思える様になったから申し上げるのです。

聖職がどんなにえらくなっても、ただそれだけでは教会が立派になったと云うことが出来ません。何故ならば、聖パウロが申しました様に、聖職は「聖徒（信徒）を全うして職を行わせ、キリストの体を建て」るために教会に与えられた役者にすぎないからであります。

「農夫は自分を殺している」と云うファーザー・ケレーの他の言葉をここで思い出します。お百姓が朝早くから日のくれるまで自分を殺して働くのはお米を収穫するためであります。どんなえらいお百姓でも、例えば農学に精通した農夫でも、自分を殺して働かなければ立派な収穫をあげることが出来ないのです。それと同じ様に、聖職が自分を殺して働くのは神様の前に立派な信徒を育て上げるためなのであります。

尤も教会の場合は聖職と信徒の関係が相関的で、よい聖職は忠実に働いてよい信徒を育てるし、よい信徒は立派な聖職を育てることとなります。

私が現在まで大過なく聖職として御奉仕出来たのは、一つには恩師がいつも私を長い目で見て下さり「いまになんとかなるだろう」と云って導いて下さったためと、もう一つは教会の信徒が聖職であるが故に私を尊敬し信頼を与え忍耐を以て育てて下さったおかげであると思って感謝いたしております。馬鹿にしたり、悪口を云ったりしても聖職は決してよくはなりませんが、尊敬されたり、愛されたりすると、これは大変なことだと思ってかえって過ちを犯さなくなるものであります。

それで信徒の方にお願いしたいのは、どうか皆さんの聖職を本当に心から敬愛していただきたいと云うことであります。そうすれば聖職はきっと立派になって行きます。

又聖職にお願いしたいのはどうか信徒を心から尊敬し、大切にしていただきたいと云うことであります。

聖職の誇りは信者であり、信者の誇りは聖職なのであります「我らの主イエスの日に我らが汝らの誇り、汝らが我らの誇りたるを終わるまで知らんことを望む」と聖パウロが申された通りであります。

私共聖職はもはや自分がえらくなろうと云う考えを捨てなければなりません。そして信徒たる皆さんが立派なよい信者になるために己を殺して働くことを励みたいと存じます。

「我らの主イエスの来たり給ふとき、御前における我らの希望、また喜悦、また誇りのかんむりは誰ぞ、汝らならずや、実に汝らは我らの栄光、我らの喜悦なり」（テサロニケの信徒への手紙1 第2章19節、20節）

（文責：広報委員会、旧仮名使いは現代仮名使いに直しました。）

司祭と語ろう（その5）

司祭　菅原裕治

今回は、現在聖パトリック教会・小金井聖公会（管理）で司牧されている菅原裕治司祭に、信徒の奥山義明さん、松本利勝さん、柳澤紗千子さんからお話を伺っていただいた。

ー まず、一番お聞きしたいのは、奥さんとの馴れ初めなんですが。

菅原　いきなりですか（笑）。そもそもは、私が世田谷区にある日本基督教団砧教会で88年から93年までの5年間副牧師をしていた時、私の神学校の後輩の姪御さんである彼女が教会に通い始めたことが始まりです。そこで青年が集まって聖研をしたり食事をしたりしているうちに、なんとなく結婚しました。

ー なんか最後の方は随分はしょりましたね（笑）。

菅原　これ以上はいろいろと語弊があるので、後は妻に聞いてください（笑）。

ー 分かりました。先生は聖パトリック教会に来て3年になりますが、最初の時の印象と今の印象で違いはありますか。

菅原　特に変わらないですね。それはすごくいい事だと思います。裏表というか、よそ行きの顔がないという印象です。

ー 教会の中にいると、この教会が初めての人にどういう印象を与えるか分からないのですが、どうなんでしょうか。

菅原　第一印象は建物の内容的な新しさです。90年以降の聖公会のあり方、対面式などをいい意味で具体化しているなと思いました。また、教会の人たちの思いが表れた包み込むような雰囲気のある教会という感じがしました。

推測ですが、これを建てたアメリカの方々の熱心さは、単純に基地の近くに教会を建てようということではなく、軍に所属しながらも、教会を通して本当の平和を日本人と共に実現したいという願いであり、その思いが今の形に繋がっているのではないでしょうか。

ー 先生は、今まで学校で長く働いておられましたが、教会との違いというのは何でしょうか。

菅原　学校というのは、基本的には中にいる人が通り過ぎていく場所なんですね。中高あわせて6年間、共に過ごして、どれだけ良い形で生徒を送り出せるかが使命なんです。

教会は牧師も信徒のみなさんも共に育ち一緒に何をするかが大事な場所ですからその辺が根本的に違いますね。

ー 先生のお説教は、旧約、使徒書、福音書を関連させてお話しなさいますが、よく勉強されていて、いつも関心して聞いています。

菅原　有り難うございます。

ー ともすれば主観だけでお話しされる方もいますが、きちんと聖書学に基づき、尚かつ霊的答する形でまとめられている。

全体が、第1部・聖書とは何か？　第2部・ユダヤ人とは何者か？　第3部・聖書と現代社会の3部に分けられ、各部に設問と応答が対話形式で進行する。

それ以外に、聖書に関するCOLUMNが8編載せられている。

紫煙をくゆらせ、一献の杯を傾けながら、聖書に触れたことのない人にも、教会に熱心に通う人にも、どんな人にも分け隔てなく分かり易く、熱っぽく、「斯界の主流に反する」（文庫版のためのとても私的なあとがき）意見も展開しながら、聖書を身近に引き寄せて学ぶことを教えられた生前の同教授の姿が目に浮かんでくる一冊です。

少し肩の力を抜いて、聖書の学びに加えてご一読をお勧めいたします。

［司祭のこの一冊］

『ぼくたちが聖書について知りたかったこと』

池澤夏樹

小学館2012年刊

司祭　田光信幸

2009年に同名の単行本が刊行されましたが、今回、新たにあとがきが加えられて、文庫化されて出版された。

本書は、長年、立教女学院短大、立教大学で聖書学の教鞭をとられた秋吉輝雄教授（阿佐ヶ谷聖ペテロ教会信徒）と詩人・小説家である池澤夏樹氏との兄弟同様の親しい縁戚関係にあったこと（あとがき）から、「2006年から2009年まで、6回にわたった…長時間対論を元にまとめられたもの」（巻末）とあるように、書名の「ぼくたちが聖書について知りたかったこと」を、池澤氏の問いに秋吉教授が応

にも豊かにされます。

菅原　意外かもしれませんが、プロテスタントの教会ではあまり旧約で説教をしないようです。ただ、私が教団時代なりたての副牧師であった時、主任牧師の西村先生が旧約学者でしたから、聖書全体の言葉に耳を傾けて説教をするということを学びました。ただ妻に言わせれば、西村先生に比べて物足りないと言うでしょうが。

―　どこでも、奥さんは厳しいですからね。あと、教会として礼拝後の交わりというのも大切だと思いますが。

菅原　そうですね。教会とは何かと聞かれた時、一緒に食事をする共同体だということです。そもそもイエス様が教えたことを極めて単純化するならば、それは二つあり、一つは分け隔てなくその場の食べ物を分け合って共に食事をすること、もう一つは死が終わりではないと信じることだと思います。そして食事は聖餐式として他の意味と合わさって儀式化されたと言えますが、本来の食事による交わりの意味を、実際の食事で補うことは大切だと思います。

―　先生はマルコによる福音書を研究されていましたが、一番の特徴は何でしょうか。

菅原　やはり物語性でしょうね。私が「福音と世界」という雑誌にマルコの記事を連載した時、編集の方が原稿を読んで「脇役たちの福音書」という題名を付けてくれました。つまりマルコ福音書は、主役はイエス様ですが、登場人物の中で模範となるのは弟子たちではなく、脇役たちなんです。弟子たちはむしろ反面教師的な役で、イエス様と一瞬出会う脇役たちが光るんです。そういう描き方をした福音書だと思います。

―　なるほど。これからも研究、勉強を続けていってください。あと、先生は病気をなさって変わったこととかはありますか。

菅原　病気をして人生観が変わったというほどのことは無いのですが、行き過ぎた医療に懐疑的、批判的であった点は、自分がそれによって今生きているわけですから、ある程度改めました。またあと何年生きて、何が出来るかを少し考えなくてはいけないかなと思っています。

―　これから先、どういう牧師になりたいですか。

菅原　志願当初からの願望で、私は普通に牧師をして、聖書の勉強をし、可能ならそれについて教え、また執筆するという生活したいと思っていました。ですから、今、その願いは叶っています。とにかく普通の牧師でありたいです。

―　そうですか。そろそろ時間ですが、始めの馴れ初めの部分をもっと詳しくお聞きしたかったですね。

菅原　妻に助けられなければ、出来なかったことは沢山あったと思っています。

―　今日は、その言葉を締めの言葉といたしましょう。

《聖書を開いて》⑥

―祈り―　命への奉仕

司祭　高橋　宏幸

「聖書には、こう書いてあっても」「イエス様は、こう言ってはいるけれども」「教会の法ではそうかも知れないけれど」、もう大昔と言ってもよい程前に耳にした言葉です。これらがまことしやかに言われ、笑い話的に聞き過ごされたりすることが仮にあるならば、私たちの信仰や霊性はいとも容易く崩れ去ることでしょう。

　サムエルの「どうぞお話しください。僕は聞いております」、聖母マリヤの「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」、そして復活前主日の福音書に記されていますゲッセマネで十字架を目の前にしていらっしゃるイエス様の祈りである「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」。これらの祈りと言える神様への応答は、先ず神様の声を聴き、自らの心に聴くことから始まっています。

　ベネディクトが定めた修道規則の中の「Ora et Labora」は「祈れ！そして、働け！」と訳されていますが、私訳になりますが、「祈ること、それは即ち命のために働き仕えること」と勝手に訳しています。静かに跪き、手を組み祈る姿は祈りの基本的姿勢ですし、その中で感謝、懺悔、悔い改め、願いなどを捧げています。けれども、聖書や伝統に聴くのであれば、キリスト教の祈りには、そこに決意表明が加わってこそ、祈りがより祈りたらしめられるという信仰があるはずです。

　祈りとは言うまでもなく、決まり文句を呪文のように唱えるのではなく、神様からの命への奉仕に繋がる何かが示され、それに微力であっても私たちの働きを捧げることでありましょう。

新しい司祭を迎えて

聖オルバン教会
W・L・ブルソン司祭のご紹介

聖オルバン教会の新しい牧師として、アメリカからウイリアム・L・ブルソン司祭が昨年11月に着任した。ミネソタ州の出身で1965年生まれ。15歳の時に召命感のようなものを感じたが、当時の主教から、まだ早いといわれた。大学ではロシア文学を専攻、大学院まで進んだところで聖職志願の気持ちを抑えがたく、中退してヴァージニア神学校へ入った。1997年に司祭按手を受けた。

福音書を読むときは、前後左右の会衆に語りかけるように読む。時に間を置き、時には強く。そして説教では、平場に下りて、身振り手振りを交えて表情豊かに語りかける。まるで指揮者のようだ。

庭いじりが好きで盆栽にも興味がある。詩人であった両親の血を受けて、自身も本にしてもいいほど沢山の詩を書いてきた。日本文学では村上春樹や遠藤周作に親しみ、芭蕉も読んだ。しかし、源氏物語は3度挑戦して3度挫折したという。

「教区のみなさんを愛し、奉仕するために多くのことを学びたいと思います。時には間違いを犯したり、みなさんに不快な思いを与えたりするかもしれませんが、その時は大目に見てください。そして神が望むようにみなさんと共にキリストの体としての命を愛し、分かち合うことが出来るように祈ってください。私に話しかける時は、日本語でお願いします。」といっている。

司祭になって15年。司祭としてもっとも脂の乗っている時に日本での牧会を始めた。どんな音色を引き出してくれるのか、聖オルバン教会信徒の熱い期待を背に受けて、今、指揮台に立つ。

聖オルバン教会信徒
吉松さち子

「芝公園の窓から」③

教会の信徒から「わたしの新年の抱負は、ジャスカンとなる歳なので･･･」という話を聞いた。「ジャスカンって？！」と思い、意味を確認してみたら「ジャスト還暦」の略語らしい。漢字文化圏では90歳（厳密に言えば数え年ですが)のお祝いを「卒寿」と言う。なぜ90歳のお祝いを「卒寿」と言うかと思い、調べてみた。「卒寿」の由来は、かつて縦書きが中心だった頃、「九十」と縦に書いた場合、「卆」となり、これは「卒」という漢字の略字を表したからだと言う。このような理由によって、90歳の長寿祝いを「卒寿」というようになったとのこと。このことを知らない方は、「卒寿」＝「人生を卒業するお祝い？」と勘違いするかもしれない。

今年東京教区は教区成立90周年を迎える。東京教区が90歳になったとしても、キリスト者の使命からの卒業はありえない。教区成立100周年に向けてキックオフの年である2013年の大斎節は、ひたすら神様がわたしたちに与えてくださった使命に対して、どのように応えていくかについて考えたい。

宣教主事・司祭　卓　志雄（タク・ジウン）

ちょっと聖書、ときどきユーモア（五）

一．弟子になった気持ち

信徒「先生、今日の説教を聞いて、まるでペテロやヨハネのようなイエスの弟子になったような気持ちになりました」

牧師「そうですか。私の説教でそのような気持ちになってくれたのは大変嬉しいのですが、私の見たところ、あなたは説教中寝ていたようなきがしたのですが」

信徒「ええ、ですから弟子のような気持ちといっても、ゲッセマネの時です」

二．3つのタイプ

信徒「先生、牧会をしていて、なんとなくやりにくいタイプの人ってありますか」

牧師「やりにくいタイプですか。うーん、それは3つありますね」

信徒「3つもあるんですか、一体どういうタイプですか」

牧師「もちろん、女房と息子と娘です」

三．教えを守る

信徒「先生、うちの女房はイエスさまの教えを必ず守らせるので困るんです」

牧師「それはすばらしいことじゃないですか、なんで困るんですか」

信徒「だって、右の頬をぶつと、必ず左もぶつんです」

私たちの教会［4］

ようこそ三光教会へ

三光教会は東京教区城南グループ8教会の一員で、東急電鉄大井町線の旗の台駅から徒歩5分、所在地は品川区旗の台6丁目番地、中原街道に面して建っています。現在受聖餐者数322名、主日礼拝（朝の礼拝、日曜学校、聖餐式Ⅰ・Ⅱ、夕の礼拝）の平均出席者数181名（2011年教務報告）。教会創立の地・港区芝白金三光町から現在地に移転したのは1940年（昭和15）。昨年11月11日に教会創立百周年を感謝し祝いました。

創立百周年記念誌『三光教会年のあゆみ』の巻頭には歴代の主任司祭今井烝治師、小笠原忍師、高橋宏幸師による座談会「三光教会が、まもってきたもの」（司会中川英樹司祭）を特集して、この教会の本質と特色を確認しました。初代牧師吉澤直江師以来百年にわたる、伝統として守ってきたものは、①礼拝（主日・平日）を大切に守る、②聖堂の扉は常に開かれている、③自給体制を堅持する、などにあります。そして教会活動を更に発展させていくことを視野に置いて中堅信徒を中心とする「新世紀プロジェクト」が5年前から始動しています。

改築成った新聖堂で創立百周年を迎えることが出来たことに教会員は感謝しております。三光教会は1945年5月に太平洋戦争の空襲により礼拝堂を焼失、1949年に仮聖堂を建築して以来聖堂の増築・修繕工事を重ねてきましたが損傷がひどく、2009年11月に旧聖堂部分を全面解体し翌年10月に新築工事を終了。創立百周年より2年早く新聖堂が完成したのです。

由緒あった旧礼拝堂の雰囲気と聖堂正面のアーチとを残し、木造建築の素朴な感じを生かすように配慮し設計された現在の新聖堂は内外に好評で、「礼拝堂の穏やかな感じと礼拝時の所作がとてもよいので2か月に一度は訪ねることにしている」と言ってくださる方（他教区）も居る程です。

対社会の諸活動も常時続けられて、複数の障害者施設・療育園・養護施設・大震災被災地との交流と支援、また識者との学びの時を持つ努力を重ねて居ります。

（三光教会広報委員会・鈴木一）

《信徒リレーエッセイ》

神様と私

東京聖マルチン教会
太田　恭子

私が聖公会信徒となったのは40年前のことです。人生に思い悩んで多くの人に話し、解決しようと苦しんでいた時、唯一納得のいく答えをいただけたのがある牧師夫人との出会いでした。

マルチン教会の信徒であり、主様第1の生き方をする夫と共に教会生活を守り、4人の子供たちと共に歩んで参りました。神様は私たちの思うような平安はお与えになりません。幾多の押し寄せる人生の修羅場を、ナイル川を通るモーセのように、その都度神様は道を整えて下さいました。

思えばキリスト教主義の幼稚園に通い、母は仙台で熱心なクリスチャンホームに育ったと死後知りました。神様が既に私を捕らえてくださっていたのだと思います。毎主日「出る　出る」とはいえ、「出ろ　出ろ」とは決して言わなかった主人は3年前に召されましたが、今は子供たち家族全員が教会に連なり、これ以上の幸せはありません。

被災地での「俳句教室」

聖オルバン教会信徒　吉松英美

東日本大震災の発生以来、ささやかながら支援活動に携わってきた。これまでに福島県のいわき市周辺、新地町、相馬港周辺、郡山、会津若松、宮城県の仙台空港周辺、仙石線沿線の塩竈、東松島、石巻、女川、そして南三陸、気仙沼、岩手県の陸前高田、釜石、大槌から吉里吉里、山田町と太平洋岸を見て回った。

そしてこの春、被災状況や復旧の様子を調べようと思い立ち、釜石へ出かけた。ある晩のこと、支援センターの担当者から、「明日、俳句教室をやってほしい」と頼まれた。私は、俳句好きではあるが、他人に教えたことはない。担当者のいかにも困った様子に負けて、あくまで時間を埋めるためと思って、次の日、仮設住宅へ出かけた。続けてやるつもりは全くなかった。それがしばらく続けてほしいと懇請され、結局、ほぼ毎月出かける羽目となった。

俳句という言葉を聞いたことはあっても、俳句を詠んだりしたことのない人たちばかりである。最初の2回ほどは俳句と短歌や川柳との違い、季語や切れ字など基本的なことだけを説明して、以後は自分の心に浮かんだことや目に映ったことを、とにかく5・7・5の形に表現することを勧めている。上手く作ろうということを考えず、5・7・5を楽しむ―そうするうちに自分でここはこうした方が良いということに気が付くようになる、それを気長に待つことにしている。いまでは作品を支援センターまで持ってきて、「見てほしい」という人や、私がいない時には、「次の俳句教室は何時ですか」と聞きに来る人が出てきた。紙と鉛筆をいつも手にしたり、専用のノートを作った人もいる。

被災地の人たちは、あの日以来、固く口を閉ざし、内にこもりがちになった人が多い。仮設住宅を訪ねても、出てこようとせず、人に会うことを避ける傾向がある。

俳句を作ることによって心を開くようになってくれれば、これ以上の喜びはない、そんな気持ちで釜石へ行く。毎回五句、十句と自作を持ってくる。それらにいくらかコメントを付して、あとは褒めることに徹している。そのうちに親しみが増し、話の話題も広がって来た。するとあの恐ろしかった瞬間のことを話し出す人が現れてきた。

ある仮設住宅でのことである。そこは自治会の会長、2人の副会長、そして事務局長の女性4人がメンバーである。この4人は仲良しで、買い物も会長の運転する車で出かける。ある時、会長のOさんがこんなことをいった。「2階まで濁流が入ってきて、夫と2人、体が浮き、頭が天井にぶつかりました。ぬるぬるするものに触り、見ると水に浮いた冷蔵庫でした。夫が『3階へ逃げろ！』というので、水が引き始めた隙をついて、3階へ逃げました。しかし、その時には夫はもういませんでした。」

これを聞いて、脇にいた副会長のTさんが驚いたようにいった。「会長さん、もう1年も一緒にいるけど、その話は今日初めて聞いた。」Oさんは、これまで誰にもいえなかったのである。それが俳句教室という全く関係のない場所で、気持ちが和んだのか、あの恐ろしかった瞬間の出来事をようやく他人にいえる気持ちになったのである。

「それでいい」と私は思った。俳句教室が終わると、Oさんが「家に寄ってください」といって案内をしてくれた。一人暮らし故、四畳半一間の仏壇に夫の位牌が置いてあった。

大震災から1年半以上が過ぎた。あれほど北から南まで大合唱のようにいわれた「絆」ということばも、がれきの処理を巡って、受け入れを拒否する自治体が続出し、今や輝きを失った感がある。

今、被災した地域で耳にすることばは、「忘れないでほしい」ということである。仮設住宅を訪問すると、身寄りをなくして一人で暮らしている人も少なくない。時間の経過とともに、被災地への思いが人々の記憶や意識の中から薄らぎ、忘れられて行くことへの不安がある。私のような者にまで「先生、この次は何時来てくれますか」とすがるようにいう。

素人のささやかな俳句教室ではあるが、それでも楽しみにして、待っていてくれる人たちがいる。その気持ちは痛いほど背中に突き刺さる。被災した人たちにそっと寄り添うだけでいい。人と人との心のつながりこそ、もっとも大切にしなければいけないということを教えられる釜石である。

被災地に震災以来2度目の冬がやって来た。

◇　◇

次回　イースター号
3月31日発行予定